

K-813

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第13集

山野辺城跡試掘調査報告書

2006

山辺町教育委員会

序

この報告書は、山辺町による道路整備事業の実施にともない、山辺町教育委員会が調査主体となり山野辺城本丸東辺の試掘調査の結果をまとめたものです。

山辺地区にある旧役場跡地を中心とした小高い台地に、中世以来、山野辺城がありました。江戸時代には山形城主最上義光公の第4子義忠公が最後の山野辺城主となり、城下町の整備、水利の開発、寺社の整備や堀の拡張修復等に力を注いでおり、現在の歴史ある町の繁栄の基礎を築きました。

山野辺城跡周辺は、重要な埋蔵文化財包蔵地としていながら、これまで本格的な調査は行われず、知られていない部分が多くありました。この度の限られた調査期間の中で、本丸を囲んでいたのであろう土星の発見で遺跡の確認ができ、縄文時代、弥生時代の住居跡や土器が発見され、4,000年以前の縄文人も小高い台地を利用し、生活の場としていたことが新たに分かりました。今回確認された遺産は歴史を解明していく上で貴重な資料として、郷土史研究の一助となればと存じます。本調査が埋蔵文化財に対する保護と活用に資することを祈念するものであります。

最後に調査にあたってご指導とご協力をいただきました関係各位の方々に心から感謝申し上げます。

平成18年3月

山辺町教育委員会
教育長 飛塚 光男

調査要項

1. 遺跡名 山野辺城跡
2. 所在地 山形県東村山郡山辺町大字山辺字櫛地内
3. 調査原因 町道高橋前小路線道路整備事業
4. 調査主体 山辺町教育委員会
5. 調査面積 34m²
6. 調査体制
調査員 川崎利夫（日本考古学協会会員）
調査員 萩木光裕（日本考古学協会会員）
調査補助員 高橋玄寿
調査作業員 久連山良夫・伊藤重雄・伊藤豊・横山悌悦・元木なおみ
事務局 飛塚光男（教育長）神保稔（生涯学習課長）
大山ルミ（文化係主査）
調査協力 山辺町建設課・山辺町文化財調査委員会
株式会社 武田組

例 言

1. 本報告書は山辺町教育委員会が平成17年度に実施した大字山辺字櫛における、山野辺城跡の試掘調査の概要である。
2. 調査期間は、平成17年9月20日より9月27日までの5日間である。
3. 本報告書の作成は1P～6P、8P、15Pは川崎利夫が担当し、7P、9P～14Pは萩木光裕が担当した。
4. 本報告中の記号は次の通りである。

S X…性格不明な遺構

S K…土壤

S D…溝

S T…竪穴式住居跡

目 次

序

調査要項・例言

目 次

1. 試掘調査に至るまで	1
2. 山辺町旧役場跡地の環境と立地	2
3. 試掘調査の方法と経過	3
4. 発見された遺構と遺物	5
5. 今次試掘調査のまとめ	15

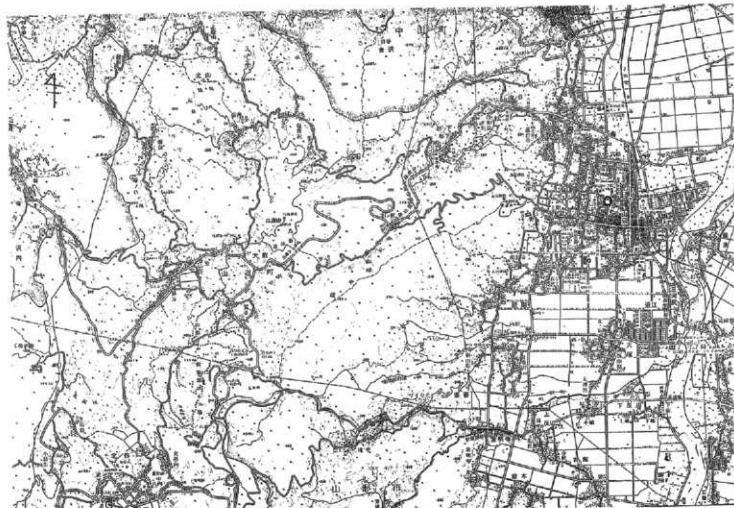
挿図・図版目次

第1図 山辺町と山野辺城本丸の位置（0印）	1
第2図 山野辺城略図	2
第3図 工事予定区域及びトレンチ配置図	4
第4図 Aトレンチ土層断面図	5
第5図 旧役場門柱 右側Aトレンチ	6
第6図 Aトレンチ調査状況	6
第7図 Aトレンチ3層出土の近代遺物	6
第8図 Bトレンチ五輪塔火輪実測図及び写真	8
第9図 出土遺物実測図	9
第10図 Bトレンチ平面図	10
第11図 Bトレンチ土層断面図	11
第12図 Cトレンチ平面図	12
第13図 Cトレンチ土層断面図	13
第14図 Cトレンチ土壌土層図	14

1 試掘調査に至るまで

今次の調査は、町道高橋前小路線の交通渋滞を緩和し、円滑な交通を確保するための公共事業に係る、山野辺城跡の遺跡分布の範囲を明らかにして、開発との調整に資するため試掘の調査を実施した。

山野辺城跡については、現在の旧役場跡地を中心として中央公民館、山辺小学校等の小高い丘一帯が城跡の主郭（本丸）副郭（二の丸）を成しており、この地の一部が道路整備事業計画予定地内にあることから、平成17年8月18日付けて山辺町長より、埋蔵文化財分布調査の依頼をうけ、山辺町教育委員会が実施主体となり平成17年9月20日から27日までの5日間で遺跡分布の範囲、性格、年代等を調査し記録として保存しておく遺跡の整備をした。



第1図 山辺町と山野辺城本丸の位置（○印） 山辺町による 1/20000

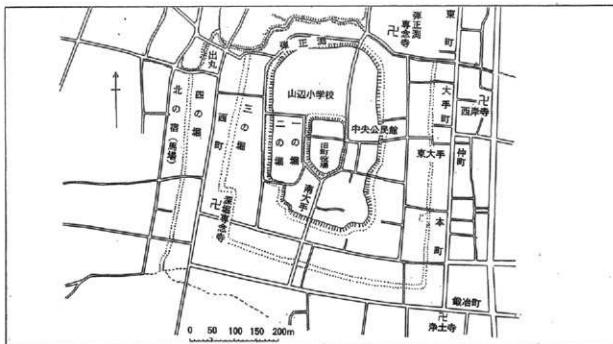
2 山辺町旧役場跡地の環境と立地

山辺町旧役場は、白鷹丘陵より山形盆地へのびる舌状の台地先端部に位置する。背後には白鷹丘陵を控え、前方は天童市より山形市街を一望することができる台地である。

町の平地部である「羽前山辺城」の辺りが標高100m前後であるのに対して、旧役場敷地内は最高所117mであるから、17mの比高差がある。この旧役場を中心に山辺の市街が発展する。山形市街の西北部にあたり、山形市とは須川をへだてて境界をなす。北には中山町が位置する。

昭和29年に近隣の大寺・中・作谷沢・相模などの村々との合併によりいまの山辺町が誕生したが、昭和32(1957)年にこの高台の地に山辺町旧役場の庁舎が建てられ、平成12(2000)年4月、現在の新庁舎ができるまで43年間山辺町役場があったのである。

また旧役場跡地は、一帯が近世のはじめ「山野辺城」跡であり、最も高い旧役場跡が本丸で、一段低い東側の中央公民館や北側の現山辺小学校、南は前小路に至る途中までが二の丸であった。二の丸の南北が約360m、東西208mの長方形の縄張りで、中心部の本丸は南北112m、東西72mほどである。二の丸の外側には三の丸があり、その四隅には東西専念寺、淨土寺などの寺院が配置されていた。そして坂を上がって東側に東大手門、また本丸には南大手門があった。城下町の名残りは地名として至るところにとどめている。この城郭のはじまりは不明な点が多いが、中世後半には何らかの館があつたとも考えられ、文献の上で「山辺」を名乗るものがあらわれている。(第2図)



第2図 山野辺城略図（「山形県中世城館遺跡調査報告書 第2集」による）

本格的に山野辺城と城下町の整備が行われたのは、慶長6（1601）年に1万九千三百石で山野辺城主となった山野辺忠義によってである。忠義は山形城主最上義光の四男で、20余年にわたり山野辺城に在城し、山形城の支城的な役割を果たして重要な位置を占めた。しかし元和8（1622）年山形最上家の改易により、破却されることになる。

なおその後、旗本高力氏や文政6（1823）年には白河藩阿部氏が二の丸の現中央公民館の辺りに陣屋を置いたこともあった。

本丸の北側の部分は、大正8（1919）年頃左沢線の開通にともない土砂の採集が行われ現在にいたっている。

山辺町には17ヵ所の城館跡があるが、この北約500mのところに「高橋城」がある。武田信安が宝徳元（1449）年に築城したと伝えられ、後に高橋遠江守正福が城主となったという。おそらく山野辺城の前身をなすものではないかと考えられる。また白鷹丘陵の山間地帯には、置賜地域と山形を結ぶ「中越え道」があり大小多くの城館跡が分布する。とくに「畠谷城」は山形最上氏の境目の城で、慶長5（1600）年の出羽合戦の際、上杉・直江方によって攻められ、はげしい戦いの末城主江口五兵衛らが討ち死にしている。

今次の試掘調査は、町道高橋前小路線（現在の中央公民館前の道路）の拡幅にともない、今の崖面も含めて現道路より5mほど本丸部分におよぶことから、工事にかかる部分のみの試掘調査を行うことになったものである。

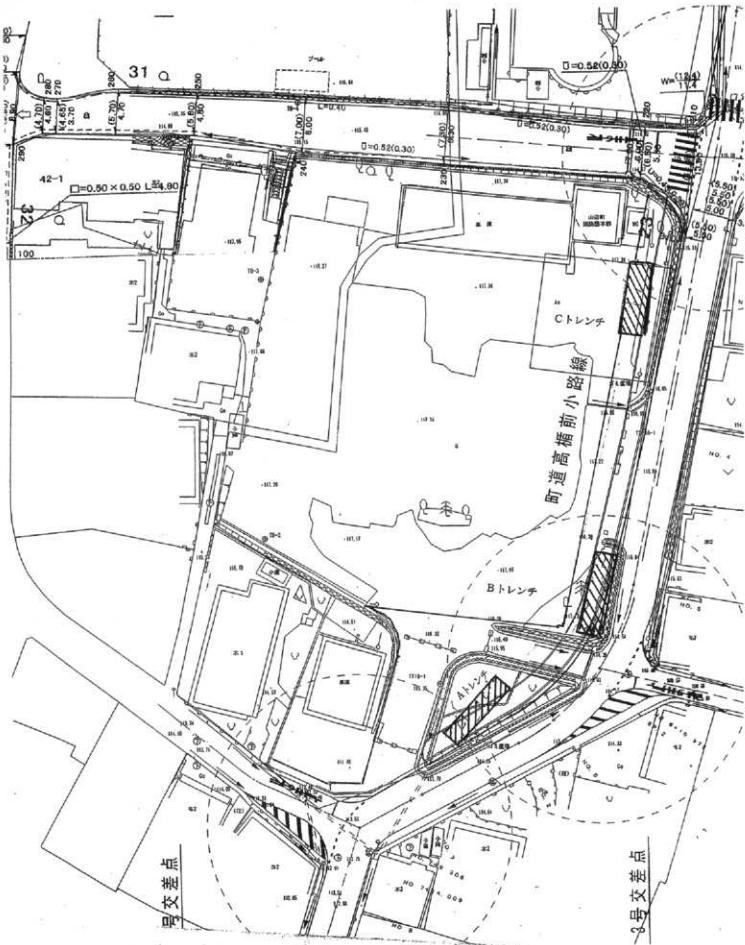
3 試掘調査の方法と経過

この度の試掘調査は9月20日より27日まで、実働5日間の短期間であった。道路拡幅部分にあたる山野辺城跡本丸東辺の試掘である。拡幅部分の工事にかかる3ヵ所に南側からそれぞれA・B・Cのトレンチ（5×2 m）を設定した。Bトレーニングのみ結果的に7×2 mとなり、調査総面積は34 m²である。

Bトレーニング上部には大石が散乱し、Cトレーニングはアスファルトが張ってあったので、石を除去したり、重機によってアスファルトをはがし、表土を取り除く作業からはじめられた。かたわら三角地をなすAトレーニングの分層的な発掘に入った。

日程は次の通りである。

- 20日（火） Aトレを20cmまで掘り下げ、アスファルトを除去する作業を実施。
- 21日（水） Cトレの掘り下げと面整理、Aトレ断面図作成。
- 22日（木） Aトレ基盤層までの掘り下げ。Cトレ面図作成。
- 26日（月） Bトレの分層的発掘。
- 27日（火） Bトレの面整理と面図作成。写真撮影。現地説明会資料準備。
- 28日（水） 午後1時半より現地説明会、60余名の参加。
- 10月4日（火） 出土遺物の整理及び検討。



第3図 工事予定区域及びトレンチ配置図（山辺町建設課による）1/5000

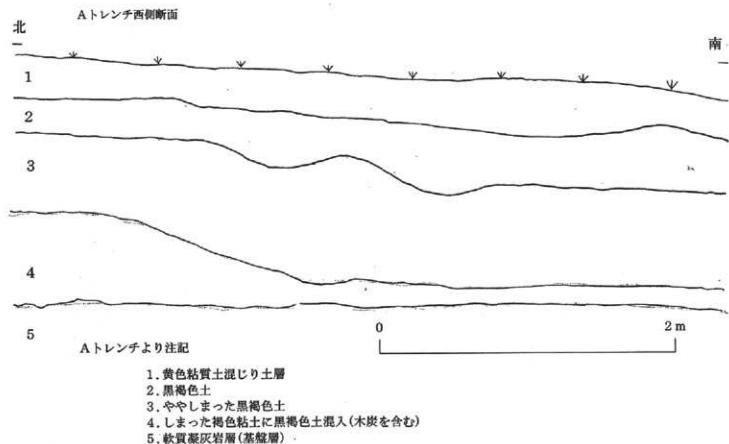
-4-

4 発見された遺構と遺物

(1) Aトレンチ

旧役場に入る石造の門柱が左右に立っている。角柱である。向かって東側のものには「昭和三十二年四月 山辺町長 竹俣清市 石工 山辺住 明日辰次郎」、西側には「役場庁舎新築落成 門柱寄贈 热海住 斎藤秀」と刻まれている。

その門柱の東側は、もと花壇であったらしく、いま三角形を呈する空き地となっている。その底辺が現町道にのぞむ崖面に平行し90mほどである。その崖面にそって北東方向に長さ5m、幅2mのトレンチを設定しAトレンチとした。この辺りの標高は116.49cm、崖下の東側の標高は113.79cmで比高差は320cmある。ここは一見平坦地であるが、わずかにゆるやかに南に傾斜する。盛土したことが明らかな黒褐色土に黄色粘質土混じりの表土層下15~16cmより、植木鉢片や近代の磁器片が出土する。その下には黒褐色土が30cm前後堆積し、さらに下層に黒褐色土が60~80cmにかなり厚くみられる。その中にも第1層に変わらず、近代の磁器片、瓶、薬品の蓋などが出土し、その下層からビニール片などもでていることから、旧庁舎が建つ頃に厚い盛り土がなされていることがわかる。(第4図)



第4図 Aトレンチ土層断面図

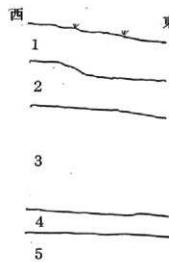
-5-

1. 黄色粘質土混じり土層
2. 黑褐色土
3. ややしまった黒褐色土
4. しまった褐色粘土に黒褐色土混入(木炭を含む)
5. 欽賞凝灰岩層(基盤層)

その下層のしまった褐色粘土に黒褐色土が混じる4層がおそらく山辺城があった頃の表土と考えられる。この層にはかなり多くの木炭を含む。この層は若干南に傾斜して、15cmほどの薄い堆積となり、その下に軟質の凝灰岩の基盤層に達する。

現地表から基盤までの深さは150cmほどで、4層がその上に載るにしても、昭和32年の庁舎建設にあたって100cm程度の盛り土がなされ、敷地の拡大がおこなわれた。Aトレンチから1.5mほどで町道が走る崖面であるが、北から南に向かうゆるやかな4層の傾斜はおそらく濠に臨む斜面を示している。城があったころの表土を確認したのみで、遺構や遺物から江戸時代はじめの状況を把握するにいたらなかった。

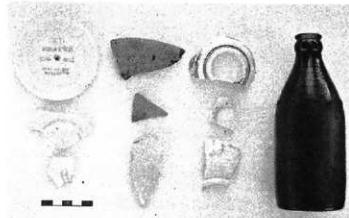
Aトレンチ北側断面



第5図 旧役場門柱 右側Aトレンチ



第6図 Aトレンチ調査状況



第7図 Aトレンチ3層出土の近代遺物

(2) Bトレンチ

Bトレンチは、今次調査区の中間部に設定した南北のトレンチで、長さ6m、北端幅約2.4m、南端幅約1.6mである。調査区は山辺城主郭平坦面の縁辺に位置し、トレンチ東側は主郭台地東縁を回る道路へ落ち込んでいる。

土層断面の検討によれば、旧町役場の敷地造成等によってかなり改変を受けている状況が把握できる。2層はその造成に伴う盛土で、植栽による部分的な掘込みが認められる。3層は黄褐色で粘質な地山をブロック状に含む土層で、3層下位は炭化物を多量に含む黒色粘土や地山を含む土層の互層状の堆積状況を示している。Bトレンチで検出されたSK 8は、トレンチ北側では僅かな高まりが認められ、主郭縁辺に沿って存在した土壠と考えられる。土壠は後世の改変によって殆ど削平されており、3層上面が現在確認できる土壠盛土のラインである。

SK 6は、土壠盛土下層の地山面に掘り込まれたフ拉斯コ状土壤で、径80cm、深さ50cmで底面は平坦である。出土遺物は特に認められない。

Bトレンチで確認された地山の状況は、土壠と考えられるSK 8の西縁から急激に落ち込んで台地山麓部に至っている。SD 8は深く落ち込んだ地山斜面で確認された溝跡で、地山面を確認するために部分的に深掘りした地点で検出された。幅は15cm、確認面からの深さは20cmで、覆土から円弧状の平行線文のある数点の弥生式土器片が出土した。

(3) Cトレンチ

Cトレンチは、旧町役場敷地の西北部コーナー部分に設定した調査区で、南北5.0m東西2.4mである。アスファルト舗装と砕石層の下位に、トレンチを斜走するケーブル埋設があるが、改変も部分的で遺構の遺存状況は良好である。

トレンチ内で確認された遺構は、土壠5基と竪穴住居跡1棟、性格不明遺構1基で、多くは縄文期のものである。

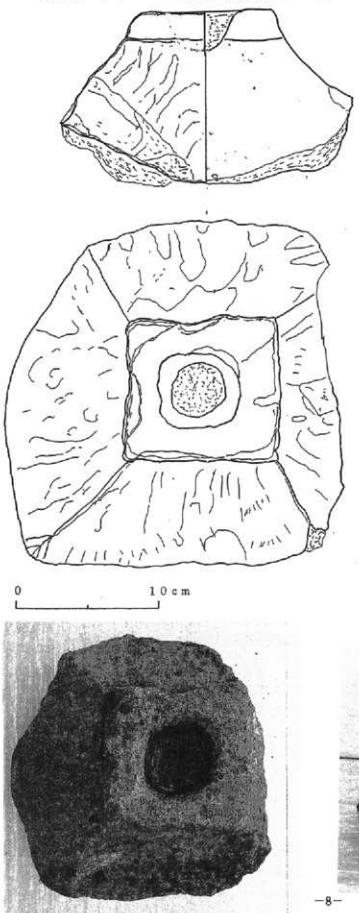
検出された土壤は、いずれも径約70cmから1.2mの円形や隅丸方形、不整円形を呈する。土壤の深さは、各遺構でばらつきがあり、SK 1およびSK 2では表層より30cmを越える。SK 3は、径80cm、深さ60cmの形で、覆土中位や壁面から縄文土器片が出土した。SK 4は、90×120cm、深さ60cmで、覆土中より縄文土器片1点、上面に混入した鉄製品2点が出土した。

また、Cトレンチ北西隅で確認された黒色土の落ち込み(SK 5)は、竪穴住居跡の一部と考えられるが、ケーブルの埋設によって破壊されている。黄褐色のかなり締まった地山面からの深さは約45cmで、覆土は比較的軟らかく、底面から台付甕底部、剥片などが出土した。

出土遺物について

今次の調査は、町道拡幅に伴う山辺城主郭東辺部の試掘であり、調査面積も限定されており、遺物は量的に極めて少ない。また、山辺城廃城後も最近まで町役場の敷地であった

第8図 Bトレーンチ五輪塔火輪実測図及び写真



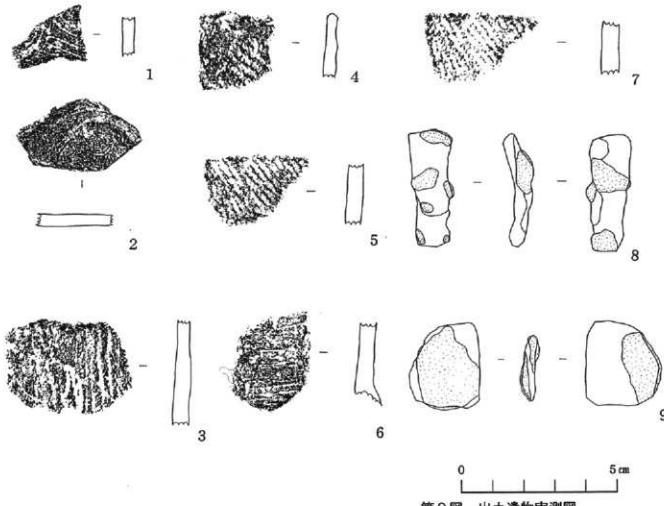
-8-

ため幾多の改変を受けており、遺構の遺存状況は良好ではない。従って、表土及び2層からは、近現代の陶磁器や瓦、ガラス製瓶等が混在した状況で出土する。

Cトレーンチ付近は、町役場敷地の北東縁にあたり、あまり削平を受けておらず、縄文期の遺構が残り土器片や石器が出土したが、遺物量は少ない。直接、山辺城に関連する遺物は今次調査では確認できないが、Cトレーンチ土壤覆土上面より鉄製品2点が出土している。(第2図8、9)

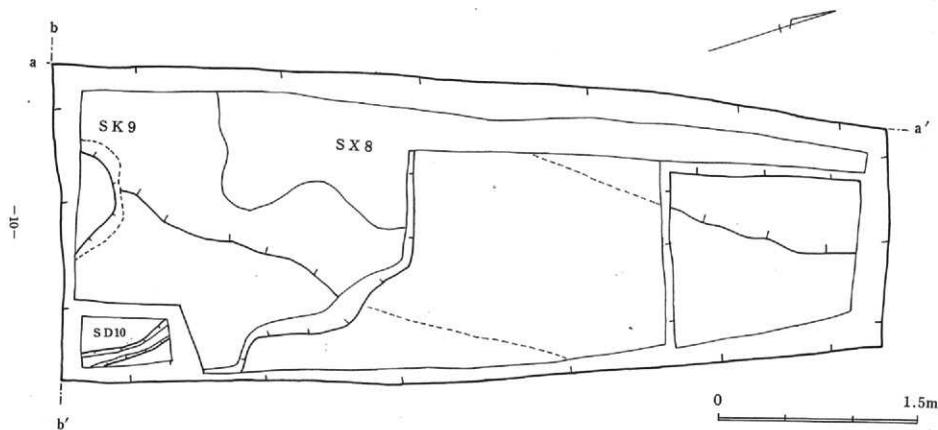
縄文土器は、すべてCトレーンチの土壤及び竪穴住居跡覆土から出土したもので、表面に粗い斜位および縦位の網文が施されている。器壁は比較的厚く深鉢の体部破片と考えられ、図化し得なかったが、小形台付壺の破片も出土しており、縄文後期前葉頃の時期と思われる。

第9図1は、BトレーンチのSD10より出土した弥生式土器の小破片で、外面に円弧状の平行沈線文が施され、弥生中期・桜井式期の土器片である。また、同図2は、平安期のイト切り無調整の須恵器坏底部である。

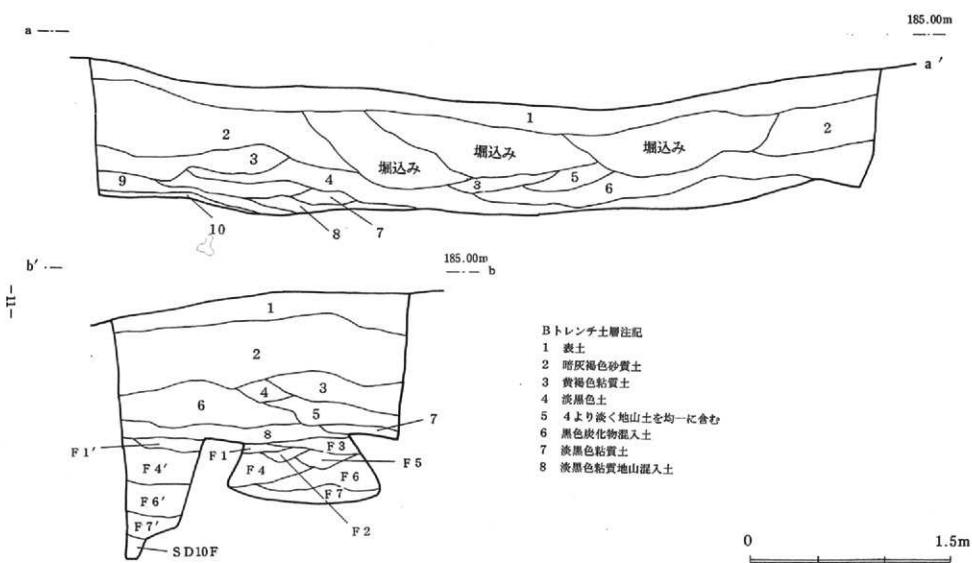


第9図 出土遺物実測図

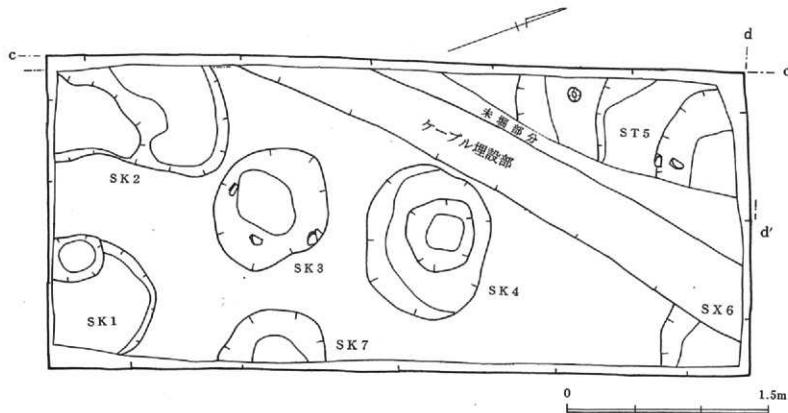
-9-



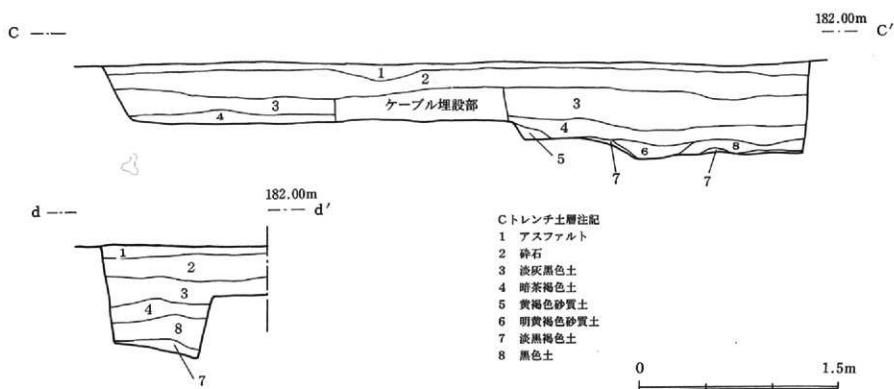
第10図 Bトレンチ平面図



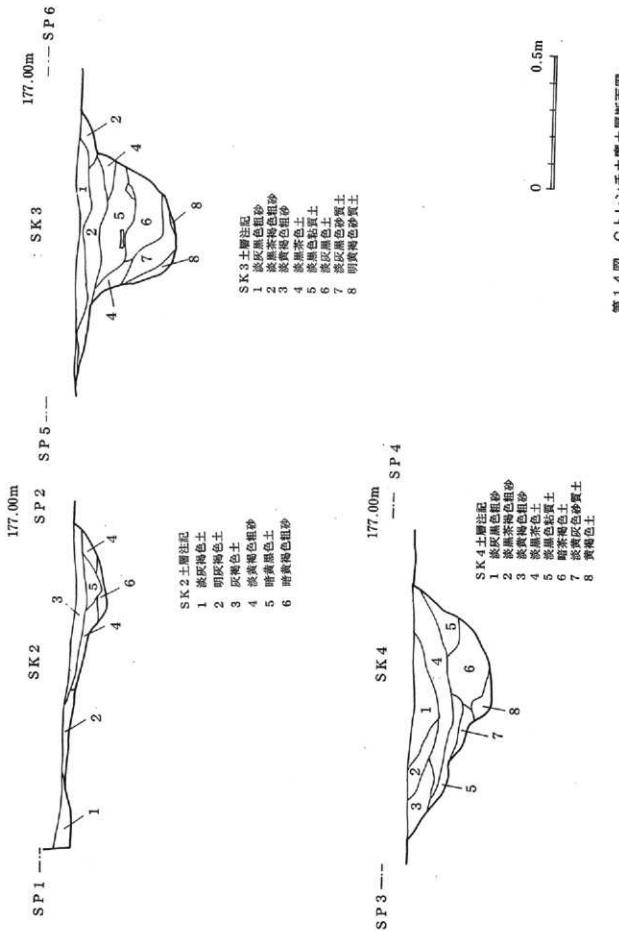
第11図 Bトレンチ土層断面図



第12図 Cトレンチ平面図



第13図 Cトレンチ土層断面図



第14図 Cトレント土壤土層断面図

5. 今次試堀調査のまとめ

この度の発掘調査は、5日間という限られた日程の、しかも道路拡幅にともなう試掘であったが、いくつかの新たな知見をえることができた。試掘にあたった旧役場庁舎の東辺は、山野辺城跡の本丸の縁邊にあたるが、周辺部のために遺構などの確認は難しいと予想していたが、Bトレントにおいて本丸を囲む土塁の基底部とおもわれる部分が一部検出された。また城が存在した時期と推定される16~17世紀の五輪塔の火輪が発見された。これにより長方形の網張りをもつ本丸は土塁によって囲まれ、その外側に二の丸にいたる水濠がめぐっていたものと思われる。

またBトレントの下層において1片のみであるが、弥生時代中期後半の「桜井式」の土器片が発見された。B・Cトレントにおいては、縄文時代後期前半の土器片や石器片とともに、Cトレントで4基の土塹、Bトレントで2基の土塹が見つかった。内1基はプラスコ状土壇であった。Cトレントでは、土壇とともにトレントの縁辺部分より竪穴住居の片隅の部分が発見された。

この台地は、中・近世の城郭のみならず、縄文時代から人々の生活の場であったことが新たに判明した。また弥生土器が見つかったことから弥生時代の遺跡があったことも想定される。

中世や近世の城の遺構は、役場庁舎建設の際、または左沢線敷設の折りの土採によりかなり破壊されたとも考えられるが、一部はその片鱗が残されているものと思われる。

この度の試掘によって、縄文時代後期からさらに弥生時代をへて、平安時代にも須恵器片の発見からなんらかの遺跡があったと推測され、そして中・近世には山野辺城が築かれ、江戸時代後半には白河藩の陣屋が置かれた。そして昭和に入り、山辺町庁舎が設置されるなど、最近まで山辺郷の中心地であり、地域の人々の政治や生活・文化の歴史にとって、きわめて重要な連鎖として続いた人々の歩みをとどめる土地であったことを改めて認識する必要があるであろう。

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第13集

山野辺城跡試掘調査報告書

平成18年3月 発行

発行 山辺町教育委員会

印刷 大流印刷
